=市史編さん便り=　【52号】 令和４年２月１日(火) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

足摺岬小学校 3～4 年・社会科授業の出前講座

１月 3 日(月)3～4 校時(15:35～12:15)の社会科授業(複式)に「関わる道具と暮らし」とのテーマで出前授業を市史編さん室・田村と吉本が実施させていただきました。

この授業は、同校平林也奈校長の依頼により実現したもので、地域で使用されてきた昔の道具に着目し、これらの使用法や構造などについて、児童らに関心を持たせることをねらいとして行いました。

授業では、洗濯板・火のし・炭アイロン・羅針盤等、江戸時代から近現代にかけて使用されてきた昔の道具の実物、本物を実際に手で直接に触れながら、何に使用されたものか、どのように使用するのかを考えていきました。

電気が使用されるようになって、生活に便利な製品が次々と誕生し、家事の時間短縮が進み、便利な世の中になったことを学習していきました。ちなみに、土佐清水市域に電気が通ったのは、大正７年(1918)、南海電気株式会社の益野川水力発電所が設置されて以降です。それまではランプや松明等が灯として使用されていました。

足摺岬小 3～4 年社会科授業(担任・山岡理江教諭)の様子(授業者・田村)

炭アイロンや羅針盤に触れて、何に使用する物かを考察する。

民具の説明を行う生涯学習課･吉本職員

土佐清水市立市民図書館のフロアー展示「中内義隆コレクション」

東京都墨田区在住・中内義隆氏（土佐清水市出身）が、去る 11 月 25 日、貴重な文化財など計 20 点を本市にご寄贈いただいたことは、前号でお知らせしました。この中から、特に貴重な書籍や地図・文化財をピックアップして市民図書館玄関フロアーに市民の皆さんにじっくりご覧いただこうと展示しました。

高知新聞清水支局・山﨑彩加記者も取材に来場いただき、担当の山下奈々司書が対応し、質問に答えておりました。

取材する山﨑記者とそれに回答する山下司書

【編集後記】

東京大学名誉教授であり、社会学者・見田宗介氏の著書『現代社会はどこに向かうのか』(岩波新書) では、私たちが生きているこの社会がどういう方向に向かっているのかという前提が根幹から揺らぎ始めていることを指摘している。

明治～昭和時代までの日本人は、社会は基本的に無限に近代化していくものであり、これにより物質的にどんどん豊かになっていくことが安心して前提になっていた。それが、20 世紀終わりには、この前提が狂い始め、安心して依存することができないものとなる。

人類が地球上に出現して何十万年か経つ、1 万年前くらいまでは極めて緩やかな増加が続く、紀元前後頃に 2 億人ほどとなり、この頃から人間は増殖を開始する。しかし、加速的な増殖は、産業革命以降である。それが、突如反転現象をとなるのが 20 世紀末、具体的には 1970 年前後である。見田氏は、これを生物学でいう「ロジスティック曲線」であるという。ある環境に適合した生物種、たとえばある湖に適合した魚が出現すると、この魚は、湖の環境が許す限り増殖を続ける。しかし、いつかは環境条件の限界点に到達する。この限界点を無視して征服というモードに固執して増殖する魚は、やがて滅亡する。

ここで、有限な環境との共存というモードへの切り替えに成功した魚は、永続する生存の軌道に乗ることができる。人類は今、地球という環境条件に対する「征服」と「搾取」という敵対的なモードを固辞し続けて破滅の道を歩むか、共存という永続する局面に入るのか、今まさにその分岐点にあると見田氏は指摘する。

話は変わるが、「広報とさしみず 3 月号」の「市史編さん室コーナー」の取材で、市内在住のあるカツオ船の元漁撈長に話を聞く機会があった。それは次のような話である。「幼い頃、祖父とカマス釣りに行った。そのとき面白いようにカマスが釣れ、調子にのってドンドン釣っていたら、“祖父に食べられるだけで釣るのを止めておけ”とたしなめられた。今、カツオやメジカが獲れなくなっているのは、これまで魚を求めるばかりで、保護することや守ることを怠ってきたからだと思う。」

これまで、私たちが無限と考えてきた地球環境は、ここにきて有限であることにようやく気づき始めた。地球温暖化等々、これらの問題は一見分離しているように見えるが、実は根っこのところでつながっているのである。『新市史・通史編』の近現代の章でそのことに触れさせていただいた。『新市史』編さんについて新たな流れが出てきたが、そのことについては後日、お話させていただく。(田村公利)